論説

規範化と情動

新自由主義化の分析における二つの視点の対話的な関係

山下芳典

はじめに

今日の様々な社会批評において、新自由主義の最も主要な定義は、一九七〇年代以降の資本主義が孕む蓄積危機の中で資本蓄積を再活性化しようとする一連の政治実践というものである。と同時に、新自由主義という語は、より広い意味で、蓄積危機の展開に伴う社会生活の大規模かつ複雑な変容を捉える語としても機能しており、資本蓄積の危機と再活性化という文脈において、私たちの生活全体がどのように再編され、どのような文化が生じているのかという議論を可能にしてきた。以下において本稿は、クィア批評における規範化の議論とこの領域で近年高まる情動をめぐる議論が、新自由主義の文化を分析するための、二つの密接に関係したアプローチであることを主張する。

より具体的には、規範化の議論と情動の議論は、新自由主義化への同意形成のプロセスの分析を深めるものであると本稿は考える。デイヴィッド・ハーヴェイは、新自由主義の政治実践を正当化するプロセスがしばしば、その同意を基礎付けるような、社会的に形成され共有された感覚の布置に依拠していると論じる（39）。彼によれば、この長いスパンで形成された感覚の布置が、新自由主義的政治実践が「社会秩序を規制するある

必然の、さらにはまったく「自然な」やり方」(41) として同意をとりつけるのを容易にしている。規範化の議論と情動の議論とは、そうした新自由主義を必然かつ自然な実践とみなす感覚の歴史的形成を分析する相補的な視座だというのが本稿の立場である。

近年の社会批評全般においてその使用が増大している情動という概念への理解を深めるために、本稿は二つの理論的参照点を導入する。ひとつはクィア批評における情動への着目である。規範化の議論と情動への着目の関係を探るという本稿の議論は、しばしば「情動的転回」と呼ばれるようなクィア批評のこうした動向をどのように解釈するかという問いに由来している。例えばクィア批評における「情動的転回」として参照されるイヴ・セジウィックの後期の仕事における情動概念の導入は、セクシュアリティの規範を歴史化して理解する彼女の前期の仕事を自ら批判するようにしてなされている。本稿の立場は、こうしたセジウィックの情動的転回に従って情動に着目するのではなく、また、情動をめぐる議論全体に背を向けるのでもなく、セジウィックの情動的転回に抗うかたちで情動に着目する可能性を探るというものである。二つ目の理論的参照点はヘルベルト・マルクーゼの論文「文化の肯定的な性格」である。マルクーゼの仕事は情動という観点から参照されることはあまりなく、さらにクィア批評においては、フーコーの規範をめぐる議論と両立する視座ではないとみなされることも多い。しかし本稿は、マルクーゼが同論文で展開する議論は、新自由主義という文脈における規範化と情動の理解を結びつける作業に大いに寄与するものと考える。

新自由主義と規範化のプロセス

新自由主義下における規範化のプロセスについてのクィア批評による議論は、ミシェル・フーコーによるセクシュアリティの議論の影響のもとに展開されている。『性の歴史・第一巻』において、フーコーは性の歴史が語られる際のある傾向を、「抑圧仮説」と呼んで批判した。抑圧仮説とは、資本主義の展開における性の歴史は一面的な性の抑圧の歴史であるという認識であり、そうした認識はしばしば、性を解放・自由化することで抑圧を否定すべきであるという修辞を伴ってきた。フーコーの同書における目的は、この抑圧／解放という修辞に介入しつつ性の歴史を語り直すことにあった。抑圧仮説を批判するフーコーは、性の歴史を、様々な制度化された知における性に関する言説の増大の歴史として捉える。資本主義の歴史の中で、医学・教育学・公衆衛生・政治理論などの領域をまたがって

「周辺的なセクシュアリティ」を「倒錯した種族」としてスティグマ化して語る言説が増大しており、こうしたアイデンティティ化された「異常さ」の分類と分析の言説を通じて、性に関する「正常さ」が社会的に構築され維持されているとフーコーは論じる。「抑圧という観点では、事態は不明瞭になる」(40)と述べるように、フーコーは性の歴史を説明するにあたって抑圧／解放という修辞を避け、規範化という言葉を導入している。規範化とはここで、「異常さ」のスティグマ化を通じて「正常さ」を社会的に構築し維持する権力の行使のプロセスを指している。

クィア批評の輪郭を捉える方法は様々あるが、この視座を基礎づけるひとつの特徴は、フーコーが展開した性の規範化の議論を、セクシュアル・マイノリティの歴史的状況の説明や政治実践と粘り強く結びつけるという点にあるだろう。例えばこの領域の中心的な概念のひとつである「ヘテロノーマティヴィティ」は、様々な性のスティグマ化を伴いながら抽象化された異性愛を規範として組織する、支配的な知と制度を捉える語として用いられてきた。このクィアな視座は、少なくとも一九九〇年代の終わり以降、セクシュアリティの規範の現在を、ますます新自由主義のプロセスと関係づけて問題化してきている。たとえばリサ・ドゥガンは、新自由主義のもとで合衆国のセクシュアル・マイノリティの政治実践に顕著な変化が生じていると指摘する。例えば同性婚の権利の追求という形で、ある種の同性愛的な欲望が、抽象化された異性愛と同様に「正常な」愛の一形態とみなされることを、その「正常さ」が定義されるプロセス自体への批判を後景化して目指すという政治指針は、セクシュアル・マイノリティの政治実践の歴史に照らせば、その必然の形でも唯一の形でもないのだが、こうした指針が、一九九〇年代を通じて、セクシュアル・マイノリティの政治実践の中で中心的な、自然化された位置を占めるようになった。こうした政治実践の変化は、規範化が伴う排他性の緩和や寛容さの増大を示しているのではなく、苛烈な排他性を引き続き伴う規範化の再編成として認識するべきだとドゥガンは論じ、こうしたセクシュアリティの規範の変化を新自由主義下における「新しいホモノーマティヴィティ」と呼んだ。ドゥガンによれば、ホモノーマティヴな性の政治はスティグマ化を批判するのではなくスティグマ化に依拠する政治として現れる傾向にあり、そうした政治実践は、たとえば同性婚を擁護する際に、ある種のエイズ・アクティヴィズムと対立する形で、「乱交」を病理化する言説を支持して「モノガマスな結婚」を「病気を予防する責任ある戦略」として描いてきた(182)。

この性の政治におけるホモノーマティヴな変化は、新自由主

義化のプロセスを内部化し、さらにはそのプロセスへの同意形成として作用している。クィア批評は、たとえば都市空間の再編において、ホモノーマティヴな性の政治と新自由主義的資本主義の深い関わりを批判的に分析してきた。新自由主義を、資本蓄積危機を新たな資本蓄積へと転化させようとする様々な政治実践として理解するならば、一九七〇年代以降のニューヨーク市の歴史には、そうした新自由主義の実践の最初期の一例を見出せる。財政危機・都市危機の最中に市の財政へのコントロールを強めた金融資本と市政の結託は、社会福祉の予算を削減し社会的インフラの荒廃を加速させる一方で、市のとりわけ中心部を、大企業の優遇される地域、また観光地や文化の中心地というかたちで、より利益を生む資本蓄積を可能にする場所へとつくり変えてきた（Harvey 45-7）。一九九〇年代のジュリアーニ市政は、「生活の質」の向上や「ニューヨークの公共空間を取り戻す」というスローガンのもとにこの市の中心部の再編成を強力に推し進めたが、この再編成の正当化は、都市危機の元凶がホームレスやポルノ・ショップの存在、「公共の場」でのゲイ・クルージングなどであると誤認させ、こうした存在を警察権力によって暴力的に都市中心部から排除し不可視化することが、都市危機を解決する道であるという修辞に依拠してきた（Smith）。

ホモノーマティヴな政治が性規範の再編成と親和性を示し、規範化への批判という観点を失うなかで、クィアな視座は、こうしてスティグマ化される生の視点から、規範化の現在の排他性と暴力性を批判してきた。クィアという語が批評的に用いられる際に帯びるこうした性格は、たとえばローレン・バラントやマイケル・ウォーナーが、クィアを「対抗公共性」と定義する際に見て取れる(1)。セクシュアル・マイノリティの政治のホモノーマティヴな転換を批判するバラントとウォーナーは、ジュリアーニ市政がスティグマ化する生の様式のただなかにこそ、ジュリアーニ市政が取り戻すと主張する「公共性」とは異なる公共性を構築する起点となるような社会生活が息づいていると論じ、それをクィアという言葉で捉えている。都市危機のただ中で極めて自然化された形で流通し暴力を正当化する規範を脱自然化する議論を展開し、新自由主義的実践が「公共空間」を保全するために不可避だと擁護した排除の「不可避さ」を問いに付す、別様の公共性の起点――それがバラントやウォーナーがクィアと呼んだ視座である。次節以降では、このようなクィア批評の歴史的展開が、近年高まる情動への着目とどのような関係を結ぶのかを検討する。

情動への着目

前節で確認したように、クィア批評は、欲望の布置の形成プロセスを、フーコーの議論に強く依拠する形で把握してきた。たとえばクィア批評の先駆となった『男同士の絆』において、イヴ・セジウィックは、彼女の研究対象を「愛」という語ではなく「欲望」という語で把握したいと述べるのだが、彼女にとってこの欲望という語の選択は、彼女の研究対象が歴史的な権力関係を構成している「社会的衝動」の「構造」(2) であることを強調するものであった。セジウィックはのちに、「情動」という語を自身の仕事の中心に据えるのだが、彼女はこの情動への着目を、自身の前期の仕事に通底するこの「欲望」を歴史化する視座からの脱却として特徴づける。彼女の仕事におけるこの理論的な移行は、たとえば論文「パラノイア的読解と修復的読解」に顕著に現れている。同論文で彼女は、欲望をめぐる規範の歴史化を目指す傾向が、クィア批評を、歴史的に形成された権力構造としての欲望の布置の暴露をおこなう分野として硬直化させてきたと批判する。セジウィックは、自身の前期の仕事を含むそうしたクィア批評の領域的盲点となっている現象を掬い取る作業として、情動という語を前景化させる。彼女は情動に着目する自身の批評を、諸権力があからさまな形で人々の生活を日々破壊する社会状況の中で、喪失や痛みに満ちた世界への反応としての「快を求めることの修復的な動因」(138) に着目する批評として定義する。さらに彼女はこうした批評を、とりわけ、これまでのクィア批評が、悲しみや怒りといった「ネガティヴな情動」を分析上想定してきた場面に、思いがけず「ポジティヴな情動の追求」(136) が見出されるという現象に着目する作業として説明した。セジウィックが論じたこの転換はクィア批評の中で、さらにはより広範な社会批評の中で、しばしば重要な参照点とされ、「情動的転回」という言葉と結びつけられてきた。例えば、情動を鍵概念にした社会批評のアンソロジーを編纂するメリッサ・グレッグは、彼女の情動への着目を決定的に方向づけた議論としてセジウィックのこの理論的転回を挙げる (Gregg 22)。

しかし、ネガティヴな情動が想定される場面にポジティヴな情動の追求が顕在化すること、喪失や痛みへの反応として快の追求が見受けられることは、本当にセジウィックの言うように、歴史化を旨とする批評的視座に立っていては捕捉できない現象なのだろうか。さらには、セジウィックが議論するように、そうした情動への着目とは、クィア批評による欲望の規範化の問題化との断絶のもとにおこなわれる批評として解されるべきなのだろうか。本稿の議論は、前述のセジウィックによる情動の

批評の方向付けに介入する。本稿の議論は、彼女の「転回」の仕方に抗って、彼女が情動という語を用いて俎上に乗せようとする文化現象を、欲望を歴史化する批評的視座によって捕捉する方途を探る。

情動という概念へのこうしたアプローチのために本稿が焦点を当てたいのが、マルクーゼが一九三七年の論文「文化の肯定的な性格」において展開した、「肯定的な文化」をめぐる議論である。彼はこの概念を、資本主義下における、解放された個人という概念に基づいたよりよい生やより美しい世界の表象を批判的に捉えるために提起した。この広がりのある主題を基礎付けるべく、彼はとりわけ、一連のブルジョワ革命による資本主義秩序の確立のプロセスと、芸術を通じた美の享受を論じる同時代の言説との関係を俎上に載せる。この時期、美の享受は、解放された個人という概念に基づいたよりよい生やより美しい世界の表象を通じて人間性を養う行為として理論化される傾向にあった。こうしたよい生や美しい世界を祝福する言説の社会的機能は、日常生活がますます市場の論理によって統御され、労働力を生活のために売る必要が大多数の人々に課される資本主義秩序の確立のプロセスを、正当化するものである、とマルクーゼは議論する。資本主義の要請を免れる解放された個人の概念に基づいたよりよい生やより美しい世界の表象が、実際には資本の論理の支配を隠蔽し、資本主義秩序の確立と存続に寄与する――よい生や美しい世界をめぐる言説が孕むこうした性質を、マルクーゼは、「文化の肯定的な性格」あるいは「肯定的な文化」という言葉で言い表した。

別言すれば、マルクーゼの議論の要諦は、資本主義下において、よりよい生やより美しい世界の社会的表現が、ある種のユートピア性とイデオロギー性の双方を不可分なかたちで帯びているという指摘である。彼によれば、封建権力に対する革命の過程で、ブルジョワ階級は文化の肯定的な性格によって都市と地方のプロレタリアートとの連帯を強固なものにし、その過程で肯定的な文化は「不満を抱く大衆を規律する」(110) 作用を帯びるようになった。資本主義秩序の確立と存続に対する間階級的同意をとりつけるという肯定的な文化の歴史的作用ゆえに、肯定的な文化は、資本主義秩序が人々に課す苦境を、それらの超越的な解消の約束という捩れた形で記録することになる。マルクーゼ曰く、肯定的な文化は「単なるイデオロギーではない。というのもそれは誤りではない客観的な内容を表現しているからだ。それは支配的な存在の様態の正当化だけではなく、その支配の痛みも含んでいる」(98)。従って彼の肯定的な文化の議論は、イデオロギー構造をその「空虚さ」において定義するような分析モデルを排している。その代わりに、彼は肯定的な

文化を、資本主義秩序が強固なものとなる過程の中での苦境の文化的な記録域であると同時に、集合的な不満を抑え込む働きをもつという、二重の作用によって特徴付けた。

興味深いことにマルクーゼは、文化の肯定的な性格は、愛や幸福の概念が社会的に認識され語られる仕方を方向づけていると指摘する。彼は、資本主義秩序が強固になる過程で、愛や幸福を「「内的生活」の豊かさ」(108) として概念化する傾向が、文学、美学、教育、哲学など様々な分野に跨る運動として見受けられると指摘し、この愛や幸福を個人化された生の理想として語る傾向を、肯定的な文化として把握する。この観点に立てば、一方で、こうした愛や幸福の言説の増大は、資本主義が支配的な社会秩序として確立する中で、苛烈さを増す社会的格差・対立に起因する社会不安や苦境を、不安や苦境の超越の約束という捩れた形で受け止め記録するものである。と同時に、こうした言説は資本主義秩序を温存しつつ苦境の解消を約束するという仕方で、資本主義秩序の存続を支持する。マルクーゼは、愛を価値づける言説が帯びるこうした肯定的な性格は、のちの資本主義の歴史的展開の中で、快の追求が様々に組織される際に受け継がれていくと示唆する。たとえば、集団的な不満を押さえ込んで資本主義が比較的安定化される際に、消費活動が管理され余暇の時間が構造化される傾向として愛の肯定的な性格が現れると彼は議論する。文化の肯定的な性格を把握する作業とは、マルクーゼにとって、世界資本主義の歴史的展開の中で「感覚、欲求、欲望、衝動」(105) が社会的に認識され語られ制度化される仕方の変遷を辿る作業となる。

クィア批評において、マルクーゼの仕事はしばしば、欲望の言説の変遷を規範化のプロセスとして捉える視座と、両立するものではないとみなされてきた。クィア批評とマルクーゼの仕事とのこうした領域的距離は、前節で述べたように、クィア批評がフーコーの議論の強い影響のもと展開してきたことの現れでもある。『性の歴史』において抑圧仮説批判をフーコーが展開した際、フーコーの批判は、精神分析の語彙を援用する政治理論へと向けられた。そうした政治理論の代表的な例は他ならぬマルクーゼの『エロスと文明』であり、同書においてマルクーゼは、本能的な苦痛の忌避と快の追求を、資本主義下で抑圧される人間性の基盤的な一性質として理論化することを試みた。この時点で、性の歴史化における抑圧仮説を批判するフーコーと、快を追求する生本能（エロス）の抑圧の歴史を論ずるマルクーゼは、二つの両立しない視座を提供していると見える。しかし、マルクーゼのこうした後期の仕事を特徴づける精神分析的語彙が一切導入されないことも手伝って、「文化の肯定的な性格」の議論は、マルクーゼの思考が、少なくとも一九三七年

の時点においては、資本主義下における欲望の一面的な抑圧を決して仮定してはいないことを明らかにする。実際、マルクーゼによる肯定的な文化の分析は、彼自身の『エロスと文明』よりもむしろ、性の歴史に関するフーコーの議論と基盤的な論点を共有している。それは例えば、欲望の布置の現在を批判的に理解するにあたって、ブルジョワ革命期の言説にとりわけ焦点を当て、そこから分析の端緒を引き出している点、その後の資本主義の歴史的展開において様々な分野を跨って展開される欲望の布置の変遷へと注意を向ける点、さらには欲望の言説が規律のメカニズムとして作用するさまを強調する点などである。両者の議論がこうした基盤的な関心を共有しているという理解の上に立てば、二つの視座はけして両立不可能なものではなく、同じプロセスに対する異なった強調点を持つ視座だと解することができる。フーコーの議論が、資本主義下における欲望の言説の形成プロセスは周辺的な性的実践のスティグマ化を通じた「正常さ」の確立と維持のプロセスであるということを明らかにするのに対して、マルクーゼの議論は、同じプロセスが、苦境の超越的な解消を約束するある種のユートピア的性質と、集合的な不満を管理して苦境を生み出す状況を温存するイデオロギー的性質を不可分な形で帯びていることを、批判的に分析することに長けている。

本節の初めに述べたように、本稿の課題は、セジウィックが欲望ではなく情動という語を前景化させ、欲望の言説の歴史化を目指してきた自身の仕事と理論的に断絶しなければ捕捉できないとした、痛みへの反応としての快の追求という現象を、セジウィックの情動論に逆らって、欲望をめぐる言説を歴史化する批評的視座を通して捕捉する可能性を探求するというものだ。マルクーゼによる資本主義下の肯定的な文化という視点の導入、および、この視点がフーコーによる性の歴史を規範化として捉える作業と両立しないものではなくむしろ相互補完的な関係にあるという確認を踏まえた上で、本稿の考えを、より具体的に、次のように言い表してみたい。すなわち、セジウィックが欲望の規範化を問題化してきたクィア批評の領域的盲点であると論じ、情動という語を導入して着目しようとした、痛みの感覚と表裏の関係にある快の追求という現象とは、資本主義の歴史的展開の中で、マルクーゼが「肯定的な文化」と呼んだ現象として説明され得るのではないだろうか。別の言い方をすれば、情動をめぐる議論は、セジウィックの方向付けに抗って、欲望を歴史化する視座を通してなされることで、文化の肯定的性格を資本主義の現在において問題化する場となり得るのではないか。

情動をめぐる議論のこうした批評的可能性は、例えば欲望の言説をクィア批評の領域で問題化してきたバラントによる、

『残酷なオプティミズム』におけるよりよい生の希求をめぐる分析において見出せる。「本能的な反応とは訓練されるものであり、単に自動的な活動ではない」(52) ことを強調するバラントは、私たちがよりよい生というものをどのように知覚し希求するかを、そうした情動が社会的に形成されてきたという観点を挿入して分析する[12]。バラントがオプティミズムと呼ぶよりよい生の約束は、社会階層を上昇する約束、職の安定性の約束、社会的平等の約束、安定した親密性の約束など多岐に渡るが(3)、彼女はこうしたよりよい生の約束が、「私たちの忍耐」(23) を醸成するメカニズムとなっており、人々の生を損なうような生活環境へと人々を縛りつけるさまに着目する。バラントはこうした残酷なオプティミズムのメカニズムを、例えばローラン・カンテの映画 *L'Emploi du temps* の解釈を通じて示す。一流と評されるコンサルティング・ファームを解雇されたヴィンセントが、失業の事実を誰にも告げずに毎日通勤するふりを続けるというこの物語において、バラントが着目するのは、親密性の時間がヴィンセントに与えるポジティヴな情動である。自宅を出て路上に停めた車の中で日中の時間を潰し自宅へ帰るという毎日の中で、ヴィンセントは自宅で彼の妻ミュリエルと過ごす時間から愛と幸福の感覚を引き出し続ける。ヘテロノーマティヴな親密性の時間は、一方で、管理階級としての訓練を受けた彼が、想定していなかった失業の只中で感じる不安やパニックの感覚を、そうした感覚の緩和の追求という形で記録する。と同時に、愛と幸福の感覚を約束する親密性の場はヴィンセントの失業を公共空間から不可視化するという作用を帯び、ヴィンセントが失業のただ中で、解雇など自身に起こっていないかのように振る舞うことを可能にし、そして彼が密かに密輸ビジネスに足を踏み入れた後も、よい生が持続しているという感覚を提供し続ける (218-222)。ヴィンセントが規範的な親密性の時間から引き出すこうしたよい生の感覚は、よい生の約束が不満を管理し忍耐を醸成しているという点で、残酷なオプティミズムの一例となる。

ここにおいて情動という語を用いる批評は、マルクーゼの「肯定的な文化」が提起した問題を、現在の文脈で思考し始めている。先に見たように、マルクーゼは、肯定的な文化という、資本主義下におけるある種のユートピア性とイデオロギー性の不可分の結びつき——資本主義下で配分される痛みを不可避的に記録しながら現実の惨禍を正当化するというダイナミズム——が、感覚、欲望、欲求、本能が社会的に認識され語られ制度化される仕方に、とりわけ愛や幸福、よりよい生やより美しい世界の表象に見出せると論じていた。バラントによる情動へのアプローチは、彼女がこれまでのクィア批評の中でおこなっ

てきた作業、つまり、セクシュアリティや親密性の問題系として俎上に乗せられる現象を「個人的な問題系」の範疇に括ることでそうした現象が帯びる社会的な作用を不問にする思考の枠組みを問い質し、欲望をめぐる言説の社会的作用を問題化するという作業と連続するかたちで、社会的かつ歴史的に形成されるものとしての愛や幸福、よりよい生の約束が、規律のメカニズムとなり、不満の表出を管理し、現状を正当化する瞬間に焦点を当てている。

情動に対するバラントのアプローチが焦点を当て始めた、マルクーゼが肯定的な文化と呼んだダイナミズムを現在の文脈において捕捉することは、マルクス主義文化批評において、たとえばフレドリック・ジェイムソンが「マス・カルチャーにおける物象化とユートピア」の中で展開した文化へのアプローチでもある。一九七九年のこの論文においてジェイムソンは、文化テクストの分析、とりわけ「マス・カルチャー」あるいは「消費者文化」と括られるテクストの分析において、それらの社会的作用を「純然たる操作」(sheer manipulation) とみなす分析モデルを批判する。ジェイムソンの議論によれば、分析対象としての文化テクストが完全に市場の論理に埋め込まれていたとしても、そうしたテクストの社会的作用は、市場そのものを言祝ぐというイデオロギー作用でさえも、白紙に都合のよい錯覚を何でも書き込むようなプロセスとして説明されるべきではない。こうした「純然たる操作」モデルの代わりに、ジェイムソンが提起するのがユートピアとイデオロギーの不可分の関係という分析モデルである。こうした分析モデルの例として、ジェイムソンはディザスター映画『ジョーズ』を取り上げ、このテクストにおいて集合的な不安やパニックが解消されるプロセスに着目する。「昔気質の個人事業、小規模ビジネスだけでなく地域ビジネス」(143) を象徴する熟練の鮫狩人が鮫に殺される一方、ニューヨーク市の都市危機を避けて移住した警察官とハイテクノロジーに精通する若手海洋学者が協力して脅威を制圧する――この物語を、ジェイムソンは合衆国のある社会秩序の象徴的な破壊と、それに伴う「法秩序の権力と多国籍企業の新しい技術者集団の間の提携関係」(144) へ希望を託す物語と読み解く。言い換えれば、フォーディズムの崩壊という歴史的文脈において、このテクストは集団的な不安や脅威の感覚が、新自由主義的社会秩序の祝福へと織り込まれていくさまをアレゴリカルに記録しているというのがジェイムソンの分析である。彼は、この危機に対する解決としての新自由主義秩序の正当化作用は、「不安と希望」という「同じ集合的意識の二つの顔」(144) を記録していると議論する。ここでジェイムソンが示すユートピア／イデオロギー批評の底流にあるのは、マルクーゼ

による「肯定的な文化」の分析である(3)。マルクーゼが肯定的な文化のイデオロギー作用には痛みの緩和の約束が含まれるという理解を強調したように、ジェイムソンの批評は、新自由主義秩序への希望の付託の物語には、危機における不安やパニックが不可避的に記録されると指摘する。

従って、バラントによる情動へのアプローチとジェイムソンの文化批評とは、マルクーゼの肯定的な文化の議論の、現在における二つの展開として理解できる。バラントによる情動の分析が、愛やよりよい生をめぐる言説に着目して、その肯定的な性格を分析し始めたのに対して、ジェイムソンの批評は、フォーディズムの蓄積危機が新自由主義的秩序へと移行する過程で、表裏一体の集合的な希望と不安が新自由主義を望み祝福する言説へと織り込まれていくさまを析出する。マルクーゼが論ずる資本主義下における痛みの記録と規律のメカニズムという二重の作用をもった快の追求という現象、そしてその展開としてのジェイムソンとバラントの議論は、セジウィックが欲望という語ではなく情動という語を前景化させて捕捉しようとした、痛みへの反応としての修復的な快の追求という文化現象を、そうした快の追求が苦境に動機づけられると同時に苦境の正当化へと織り込まれていくという作用に着目しながら、資本主義の現在において問題化する視座を提供している。

危機の感覚の規律化

前節で見たように、例えばバラントによる情動へのアプローチは、愛、幸福、そしてよい生をめぐる言説が帯びる肯定的な性格を批判的に分析し始めている。この傾向は、例えば第一節でみた、都市空間の新自由主義的再編のプロセスを問題化するというクィア・ポリティクスの継続的な課題を、別のアングルから押し広げ深めるものである。このことを以下では、サミュエル・ディレイニー著『タイムズ・スクエア・レッド、タイムズ・スクエア・ブルー』が捉えた、新自由主義化への同意形成の一場面を通して示したい。このエッセイ集でディレイニーは、タイムズ・スクエアの再開発の過程において、この地域で暮らしてきた人々の日常を描き、彼らが再開発についてどのような声をあげていたのかを記録することを試みる。ディレイニーの記述によれば、開発の手続きへのはっきりとした怒りが発せられる一方で、とりわけ再開発のごく初期の段階では、再開発をめぐる彼らの声は、常に明瞭で断固とした反対ではなかった。都市空間の再編計画についての思いは、ときに、明瞭なものではなく、ネガティヴな情動とポジティヴな情動がない交ぜになったものとして発せられた。

ホークとあだ名される人物は、再開発のとりわけ初期段階ではアンビヴァレントな反応を見せ、のちに反対を示すようになった者たちの一人だ。ホークは当時、労働条件の悪化を理由に市のインフラを整備する職を辞した後、タイムズ・スクエアの労働者階級のバーに勤め始めており、ディレイニーとは、同性間のセックスの場所となっていたポルノ・シアターで知り合った。ディレイニーの記述によれば、進行中の再開発に対するホークの見解は「ある意味でいいものだが、しかし別の意味ではよくない」(104) というものだった。ホークはかつてのタイムズ・スクエア周辺の危機に引き裂かれた都市生活の不安定さから、一度は「生活の質」の向上を掲げるジュリアーニ市政に希望を託し、票を投じた。しかし彼は今や決してジュリアーニ市政に賛同してはいないと言う。というのは、ジュリアーニ市政による都市空間の再編の仕方は、タイムズ・スクエアに集まっていた人々の生活を損なうようになされることが明らかとなったからであった(103-4)。第一節で述べたように、市の公共空間を取り戻すという名のもとになされたジュリアーニの政治実践は、実際には苛烈さを増す規範化と排除の政治に他ならなかった。ディレイニーによれば、のちの再開発の過程でホークが勤めていた労働者階級のバーも破壊されたのち改築され、ホーク自身が、再開発を経たタイムズ・スクエアの「公共空間」から排除され、ディレイニーの前から姿を消した数多くの者たちの一人となった(xix)。

ここで新自由主義は、それが約束するよい生に一度は希望を託したホークを含む人々を裏切り、そうした希望を託すことで避けたいと願った生活環境がさらに悪化していくという過程へと人々を縛りつける点で、バラントが残酷なオプティミズムと呼んだ性質を帯びる。この新自由主義の一性質は、資本主義秩序の存続に間階級的同意がとりつけられていくプロセスを分析するマルクーゼが、肯定的な文化と呼んだダイナミズムと連続的なものだ。ジュリアーニ市政が新自由主義的資本主義に適合する都市空間の再編成を進めるにあたって掲げた「生活の質」というスローガンは、蓄積危機の最中の都市生活の惨状を緩和し、生活をよりよいものにするという約束を含んでいた。マルクーゼが、肯定的な文化は苦境の緩和の約束であり苦境の記録を不可避的に含みながらそうした苦境の存続を正当化すると述べたように、ジュリアーニ市政による新自由主義化への同意形成の過程は、蓄積危機の最中に感じられる不安や痛み――たとえばホークが不安定な労働状況や都市生活の最中に感じていたものを含む――の管理と吸収として現れる。ユートピア／イデオロギー批評をマルクーゼの「肯定的な文化」の視野を押し広げて見出すジェイムソンの語彙に従えば、ジュリアーニ市政が

とりつけたのは、危機という文脈における集団的な感覚の一様態としての不安と希望の結合と言えるかもしれない。

ディレイニーのエッセイが捉えた、ホークのアンビヴァレントな反応が同意としてとりつけられている間に「取り戻された公共空間」から彼自身が排除されていくという過程は、新自由主義化と呼ばれる社会生活の再編の一つの特徴と言えるかもしれない。継続的に展開していく蓄積危機の最中にあっては、新自由主義の修辞が約束するよい生への希望の付託という現象の分析は、痛みや不調や不安といった社会的感覚の表現がどのように規律されているかという問いと切り離すことができない。言い換えれば、新自由主義化への同意形成は、危機における痛みや不調や不安の管理としても現れている。ここにおいて情動をめぐる議論が前景化しているのは、危機という文脈における快の追求という文化現象の分析とは、同時に、苦境の表現の規律化を分析する作業であるということだ。その意味で情動への着目は、欲望の規範化のプロセスを問題化するというクィア批評の課題を、危機の文脈における肯定的な文化の批判的分析というアングルから、深めていく作業であると言える。

註

(1) Berlant and Warner "Sex in Public" およびその一年後に出版された Warner, *The Trouble with Normal* で展開された議論を参照。

(2) 情動の理論はしばしば、情動を自動的または自律的な身体反応と理論化する傾向があり、バラントの議論はここでそうした傾向に介入しつつ情動概念を用いることを強調する。他に、情動を身体の自動的あるいは自律的反応とする説明に介入するかたちでおこなわれる情動の分析としては、例えば Ahmed を参照。

(3) ジェイムソンは *Archaeologies of the Future* において、自身のユートピア批評の底流の一つとしてマルクーゼによる肯定的な文化の分析を挙げている (xv)。

引用文献

Ahmed, Sara. “Happy Objects.” *The Affect Theory Reader*. Ed. Melissa Gregg and Gregory J. Seigworth. Durham: Duke University Press, 2010. 29–51.

Berlant, Lauren. *Cruel Optimism*. Durham: Duke University Press, 2011.

———, and Michael Warner. “Sex in Public.” *Critical Inquiry* 24.2 (1998): 547–566.

Delany, Samuel R. *Times Square Red, Times Square Blue*. New York: New York University Press, 1999.

Duggan, Lisa. “The New Homonormativity: The Sexual Politics of Neoliberalism.” *Materializing Democracy: Toward a Revitalized Cultural Politics*. Ed. Russ Castronovo and Dana D. Nelson. Durham: Duke University Press, 2002. 175–194.

Foucault, Michel. *The History of Sexuality: Vol. 1*. Trans. Robert Hurley. Penguin Books, 1978.

Gregg, Melissa, and Gregory J. Seigworth. “An Inventory of Shimmers.” *The Affect Theory Reader*. Ed. Melissa Gregg and Gregory J. Seigworth. Durham: Duke University Press, 2010. 1–28.

Harvey, David. *A Brief History of Neoliberalism*. Oxford: Oxford University Press, 2005.

Jameson, Fredric. *Archaeologies of the Future: the Desire called Utopia and Other Science Fictions*. New York: Verso, 2005.

———. “Reification and Utopia in Mass Culture.” *Social Text* 1 (1979): 130–148.

Marcuse, Herbert. *Eros and Civilization; a Philosophical Inquiry into Freud*. Boston: Beacon Press, 1966.

———. “The Affirmative Character of Culture.” *Negations: Essays in Critical Theory*. Boston: Beacon Press, 1968. 88–133.

Sedgwick, Eve Kosofsky. *Between Men: English Literature and Male Homosocial Desire*. New York: Columbia University Press, 1985.

———. “Paranoid Reading and Reparative Reading.” *Touching Feeling: Affect, Pedagogy, Performativity*. Durham: Duke University Press, 2003. 123–151.

Smith, Neil. “Giuliani Time: The Revanchist 1990s.” *Social Text* 57 (1998). 1–20.

Warner, Michael. *The Trouble with Normal: Sex, Politics, and the Ethics of Queer Life*. New York: Free Press, 1999.

（やました　よしのり／修士課程修了、ケント州立大学博士課程）